

奄美民謡の未来

梁川 英俊
鹿児島大学法文学部

要旨

奄美には多くの民謡がある。しかし、その伝承にはさまざまな問題がある。奄美民謡の代表ともいえるシマウタは、今日島外にも新しい聴衆を獲得しているが、コンクールや教室の影響で昔ながらの味を失ってきているともいわれる。かつて奄美諸島の各集落で盛んに唄い踊られた八月踊りウタも、生活環境の変化や過疎化などにより、その伝承が危ぶまれている。最近では民謡の伝承において、シマグチの味わいを見直そうという動きもあり、それが伝承にどのような影響を与えるかが注目される。

The Future of Amami Folk Songs

YANAGAWA Hidetoshi
Faculty of Law, Economics and the Humanities, Kagoshima
University

Abstract

Amami Islands have a lot of folk songs. But there are many problems in their transmission. The most popular folk songs of Amami Islands called *Shimauta* are getting new audiences in all over Japan. On the other hand they are losing their originality under the influence of shimauta competitions and shimauta schools. The *Hachigatsu-odori-uta*, songs of ancestor worship, thanks and prayer for rich harvests, have quite a few difficulties in their transmission with recent social changes and progress of depopulation. Some attempts to reevaluate the Amami dialect called *Shimaguchi* can produce good results for the future of Amami folk songs.

Key words: Amami Islands, Shimauta, Hachigatsu-odori, folk songs,

transmission, Shimaguchi

はじめに

奄美には多くの民謡があるが、いまなお盛んに唄われているのは一般にシマウタの名で呼ばれるあそび歌と、旧暦八月に唄い踊られる八月踊りウタであろう。

このうち、シマウタを取り巻く状況は、ここ数年大きく変化している。元ちとせをはじめとする若手の唄者たちの台頭、さまざまなレーベルから発売されるCD、増加する本土でのコンサートなど、その周辺は年々賑やかさを増している。ポップ風のアレンジや、ピアノなどの洋楽器による伴奏も盛んである。が、その一方で、ステージや教室が中心のシマウタの状況を嘆き、歌掛けや歌遊びの時代を懐かしむ声も少なくない。かつて集落（シマ）ごとに異なっていたシマウタが、いまではただの「島唄」になってしまったという評言もある。

一方、奄美で「み八月」と呼ばれる夏正月に各集落で唄い踊られる八月踊りウタは、その集団性ゆえにシマウタのような均質化をまねがれ、いまだに集落ごとの独自性を残している。しかしその伝承には、シマウタの伝承とはまた違った意味でのさまざまな困難がある。奄美民謡は今日どのように伝承されているのか。また、その伝承の課題とは何なのか。シマウタと八月踊りについて調べた。

シマウタの伝承

シマウタの伝承の調査に当たっては、世代の違う4人の唄者に、数度にわたってインタビューを行った。70代前後ではほぼ同世代のY氏とE氏、40代後半のI氏、20代前半のS氏である。いずれも奄美や鹿児島を中心に幅広く活躍している唄者である。質問では、彼らがどのようにシマウタを修得したのか、現在のシマウタの状況をどう考えるかという点が中心になった。

唄者の世界では大御所というべき年齢のY氏とE氏は、いずれも40歳を過ぎてから本格的にシマウタを始めた。Y氏は人に請われて出場したコンクールで優勝したのが、E氏は武下和平が主宰するシマウタ同好会に入会したことが、それぞれきっかけになった。両氏とも幼少期のシマウタの思い出は少なく、父親や祖父が唄っていたのを覚えている程度である。身近に歌掛けや歌遊びなどがあった記憶もあまりないという。若いY氏にとってシマウタは「難しい」「とっつきにくい」

という印象があった。人によって歌詞が変わるのもその印象を助長した。そのため、コンクールで優勝したときも、「これでいいのか」という思いだったという。E氏もまた若い頃は三味線よりもエレキギターに熱中した。二十歳前後に島を出て大阪に行き、そこで武下和平のレコードに出会うまで、シマウタに対する興味はほとんどなかったという。

そのためか、両氏はともに故郷の集落（シマ）のウタに対するこだわりはなく、自分の好きなウタを唄うのがいちばんという考えの持ち主である。たとえば、Y氏はコンクールに優勝してから、レパートリーを拓げる必要に迫られて、カセットレコーダーを片手に奄美大島各地でウタを録音して歩き、それらを折衷させてヒギヤ唄でもカサン唄でもない独特の節回しをつくった。E氏もまた徳之島の出身であるが、徳之島の民謡は長く一曲も知らず、録音する必要に迫られてはじめて勉強して覚えたという。

両氏はまたシマウタの変化についても寛容で、とくにY氏は「ウタは変わるからこそ長生きする」と言い、若い人にも「古いウタは大事だが、これからは新しいことをやらないと進歩しない」と言い続けてきたと語る。しかし、その彼らでも最近の状況にはとまどいを覚えることが少なくないという。たとえばE氏は若い女性唄者の高音化を指摘し、合わせにくくなったと嘆く。Y氏もまた洋楽器で演奏するのはいいが、少しやり過ぎではないかと危惧する。

4人の唄者中もっとも若いS氏の場合はどうか。多くの若手の唄者がそうであるように、S氏はいわゆる「教室世代」である。小学生のときに民謡教室の発表会を見て感激し、シマウタを習い始めたのだという。当時はまだシマウタをやる子供は珍しく、教室の人数も少なかった。喜界島の出身であるが、教室以外で生のシマウタに触れる機会はなく、もっぱら講師のウタを手本とした。子供の頃からコンクールに出場し、いまでも毎年のように出場している。同世代の唄者にはメジャーデビューする者もいるが、S氏自身にはそうした志向はなく、ポップス路線も面白いとは思いますが、あまり関心はないと語る。好みはむしろ純なシマウタにあり、それをじっくり勉強していきたいと考えている。

一方、40代後半のI氏は、大御所の世代と若手世代のいわば狭間の世代である。同世代でウタをやる人も少ない。子供の頃から親子ラジオを通じてシマウタを聴いてはいたが、格別の興味はなく、若いとき

はギターやドラムを演奏していた。シマウタの魅力に目覚めたのは40歳を過ぎてからで、父親の法事で島に帰ったのがきっかけになったという。現在は武下和平の同好会で研鑽を積んでいるが、コンクールなどには参加していない。シマウタのポップス風のアレンジには抵抗はないが、いまは伝統的なシマウタをきちんと勉強して、年を取ってから歌遊びをできるような唄者になりたいと語る。

しかし、若い世代が伝統的なシマウタを修得しようとするときに立ちはだかるのが、シマグチの壁である。40代後半のI氏は幼少期には友達同士でシマグチを話していたが、学校では厳しく禁止され、いまでは使う習慣がない。同好会でもよくシマグチの発音がおかしいと指摘されるといふ。I氏よりもさらに若いS氏の場合は、もはや自分ではシマグチが話せず、祖父母の使うシマグチをなんとか理解できる程度である。シマウタ教室でも講師は歌詞についてはほとんど説明せず、詳しい内容は書物を手掛かりに自分で調べなければならなかったという。

シマグチに関してはベテラン唄者からも注文が多い。Y氏はいまのシマウタがコンクールの影響で「旋律」本位になり過ぎていると指摘し、若い唄者がシマグチを勉強することによって、いま一度ことばの世界に立ち返る必要があると力説する。E氏もまたシマウタの歌詞の素晴らしさを「よくぞ作ったと思う」と称え、シマウタの歌唱にはシマグチを覚えることが不可欠であると説く。どうやら、ポップス路線に打ち興じるよりはシマグチの勉強をというのが、ベテラン唄者の本音のようだ。

八月踊りの伝承

八月踊りの伝承に関しては、2005年9月14日から16日まで（奄美ではアラセツに続くシバサシと呼ばれる「み八月」の後半の期間）、笠利町笠利集落（大笠利集落）で調査する機会を得た。

大笠利集落の人口は約千人。奄美大島のなかでも人口の多い集落である。奄美の集落は多く山側の里（サト）、海側の金久（カネク）の二区からなるが、大笠利集落は例外的に城前田（一区）、里前（二区）、金久（三区）の三区からなる。八月踊りは地区ごとに分かれて踊られるが、自分の地区以外の踊りに参加する人はほとんどおらず、各地区は暗黙のライバル関係にある。その結果、各地区のウタや踊りにはそれぞれの伝統に基づく個性が生まれる。たとえば大笠利集落の場合は、

一区の唄い方は比較的ゆっくりで、テンポが速くなるとすぐに止める。二区は一曲の時間が長く、ウタの進行とともにテンポもどんどん速くなる。三区は全区中でもっとも唄い方がゆっくりである。その他、各区では一晩に訪問する家の数、「六調」の唄われ方、祝儀（ハナ）の披露の仕方など、細かな点での相違も多い。

八月踊りはもともと家祓いの儀式として始まり、集落内のすべての家を巡るのを習慣としていた。大笠利集落でも 20 年くらい前までは、昼の 2 時から夜中の 2 時まで全戸を回っていたという。しかし、集落の住民がすべて漁業や農業に従事していた時代ならいざ知らず、集落内に勤め人が多くなると、この習慣は時代にそぐわぬものになった。いまでは踊りの時間は夜 7 時半から 11 時までに短縮され、一晩に訪れる家もせいぜい 3、4 軒である。こうした動きは、1980 年前後を境にして奄美大島全体で始まったという。この一事からも分かるように、現在の八月踊りにかつての勢いはない。それどころか、大笠利集落では、その存続を危ぶむ声もある。

理由のひとつは、「打ち出し」の高齢化にある。打ち出しはウタを即興でつないでいくウタの先導役であり、打ち出しがいなければ八月踊りそのものが始まらない。したがって、八月踊りには熟練した打ち出しの存在が不可欠であるが、その後継者がいない状態なのだという。たとえば、一区には女の打ち出しは一人しかおらず、二区でも男の打ち出しは 3 人だけだという。熟練した打ち出しを養成するためには場数を踏ませるしかないが、踊りの機会そのものが減ってきているいま、それもなかなか難しいという。

もちろん、踊りを保存するための努力もなされている。たとえば、一区では練習のために過去の八月踊りウタを録音した CD を制作した。二区でも八月踊りウタの歌詞集を作成し、月二回、第二・第四火曜日に練習をしているという。三区でも同様の試みがあったが、集まりが悪くて自然消滅したそう。いまでは二区の練習に一区や三区からも人が来る。これまで保存の試みは区ごとで行われていたが、もはや競い合うのではなく、互いに協力し合わなければならない状態だという。なお、二区では毎年の八月踊りでこの歌詞集に収録されている 26 曲をすべて唄い切ることを目標にしており、係りを決めて唄った曲をチェックしているという。訪れる家ごとに必ず唄わなければいけないウタもあり、そのため一晩に回る家は 3 軒と決めているそう。

また踊りの参加者を増やすために、以前は初心者容易に踊りの輪

に加えなかった地区でも、いまでは積極的に加わるよう勧めている。参加者の数は地区によってまちまちであり、たとえば二区のように集落でもっとも人口の多い地区は、当然他の区より参加者が多くなる。年齢構成もそれぞれ特色がある。たとえば、一区は比較的高齢者が多く、二区は中年層が中心で子供の数も多い。三区は比較的若い人が多く、子供も多い。

そのなかで各区に共通して気になったのは、中高生の姿の乏しさであった。もっとも、この大笠利集落には「わらべ島唄クラブ」という、子供たちにシマウタを伝承することを目的として結成された組織があり、小学生から高校生まで50名近いメンバーがいる。奄美を代表する若手唄者である中村瑞希氏や吉原まりか氏を育てたことから分かるように、次世代へのシマウタの伝承には実績がある。聞くところでは、このクラブでもシマウタのみならず八月踊りウタも練習しているという。こうした地道な努力がどのように実を結ぶか、今後を期待したい。

おわりに

以上、ごく簡単にシマウタと八月踊りの伝承の現状を概観した。そのうちシマウタに関しては、伝承そのものに対する不安はまったく聞かれず、話題は今後どのようなウタを伝承すべきかということに終始した。インタビューをして意外だったのは、ベテランの唄者でさえシマウタが集落（シマ）のウタであるという意識をあまりもたず、彼ら自身がすでにシマウタから「島唄」へという転換が始まった時代にウタを始めたことだった。一方、若い世代については、少なくとも筆者がインタビューをした唄者には、ポップ志向などはなく、むしろ昔ながらのシマウタを真面目に唄っていきたいという声が聞かれた。ベテランの唄者からはコンクール化したシマウタに対する批判も多かったが、それは必ずしもそうしたウタの否定ではなく、むしろシマウタが一元化することへの危惧であるように思えた。社会における認知度が格段に上がったいま、シマウタは伝統と新しさの間で揺れ動いているように思える。

一方、八月踊りでは、シマウタと違って、その伝承そのものを危ぶむ声が聞かれた。実際、奄美の集落のなかには、もはや住民が八月踊りウタを唄うことができず、録音されたウタに合わせてただ踊るだけという集落も少なくない。一般に伝統行事は、社会構造が変化して人々の意識が変わればその必然性が見失われ、その存続には新たな意味の

模索が不可欠になるが、八月踊りも同様だろう。集団が基本となる八月踊りの場合、シマウタのように個人の自由にまかせるわけにもいかない。大笠利集落の場合にも、表面上は大変に活気があるように見えたが、その裏には踊りの存続に向けた多くの住民の努力があった。シマウタに比べてはるかに口承性が強い八月踊りウタの伝承には、楽観を許さない要素が多くある。

最後にシマグチについて触れたい。すでにベテラン唄者の指摘にもあったように、シマウタはいまコンクールなどの影響で旋律本位の方向に大きく傾斜している。そうしたなかで、シマグチの重要性を強調し、ウタにおけることばの魅力を取り戻そうという声も大きくなっている。昔ながらの歌掛けを再評価すべく、昨年、奄美で発足した「奄美歌掛け文化保存会」はこの傾向を象徴するものだと言えるだろう。もちろん、ことばの問題は一筋縄ではいかず、こうした試みもすぐに成果が現れるものとは思えない。しかし、ブームのなかで等閑視されてきたシマグチに光が当てられたことの意義は大きく、これを機にこれまで別々に考えられがちであったシマウタと八月踊りの伝承が、シマグチという共通の土俵の上で見直されるかもしれないという期待も抱かせる。今後、ウタの伝承が島口教室や島口大会との関連で語られることもあり得よう。

音楽の魅力からことばの魅力へ、これが奄美民謡の伝承の新たな課題と言えるかもしれない。